幻聴と夢の中の音

Auditory Hallucinations and Sounds in Dreams

真銅正宏

Shindo Masahiro

一、幻聴

文字芸術である小説の読書行為において、作中の音を聞くというのは、いったいどのような現象であろうか。

黙読の場合、その音が耳を通して物理的に聴覚信号として伝わるわけではないことは確かであろう。となると、それは、実際の音を伴わない、いわば想像上の音ということになる。音読の場合であっても、実際の音を音読の声がせいぜい擬音として真似ているのを聞くのであって、実際の音でないことに相違はない。

そうならば、読書行為における音とは、すべて、擬似の音を想像して脳で再現した虚構のものということになる。

これは、幻聴と呼ばれる、実際の音がないのに聞こえるという現象とも共通している。ただし、読書行為における音は、それがあると想像する行為であるのに対し、幻聴は、聞こうとする意志とは無関係に「聞こえる」ものであるという相違はある。

読書行為に限らず、むしろ一般的に、音を聞く、という行為は、耳という感覚器官を介した聴覚による物理的な現象を超えて、もう少し広い範囲に及ぶもののようである。ここでは、読書行為における聞くという行為の仕組みを探究するために、幻聴や夢の中の音という、実際の音を必ずしも伴わない音に注目し、その特徴を探りたい。

例えば佐藤春夫「田園の憂鬱」（『中外』一九一八年九月）に描かれる音は、現実のそれか、幻聴か、極めて曖昧な描かれ方をしている。これはもちろん、主人公の、病的なとも見える鋭い感受性や神経の動きからもたらされるものであろうが、そこには、登

場人物が音というものに神経を集中する状況や、闇や静けさという、小説に特有の人物描写の特殊性が関係しているようである。それは、要するに、日常においては、他の人物や事物と同等の存在感しかもたない登場人物に、殊更に焦点を当て、クローズアップするという、小説描写の特殊性である。

彼は眠ることが出来なくなつた。

最初には、時計の音がやかましく耳についた。彼は枕時計も柱時計も、二つともとめてしまつた。全く、彼等の今の生活には、時計は何の用もないただやかましいだけのものにしか過ぎなかつた。それでも、彼の妻は、毎朝起きると、いい加減な時間にして、時計の振子を動した。彼の女は、せめて家のなかに時計の音ぐらゐでもして居なければ、心もとない、あまりに淋しいといふのであつた。それには彼も全く同感である。何かの都合で、隣家の声も、犬の声も、鶏の声も、風の声も、妻の声も、彼自身の声も、その外の何物の声も、音も、ぴつたりと止まつて居る瞬間を、彼は屢々経験して居た。その一瞬間は、彼にとつては非常に寂しく、切なく、寧ろ怖ろしいものであつた。（略）

時計の音をとめると、今度は庭の前を流れる渠のせせらぎが、彼には気になり初めた。（略）

時計のセコンドの音、渠のせせらぎ、汽車の進行するひびき、そんな順序で、遂に彼は、その外のいろいろな物音を夜毎に聞くやうになつた。その重なるものの一つは、彼が都会で夜更けによく聞いた、電車がカアブする時に発する遠くの甲高な軋る音である。それが時々、劇しく耳の底を襲うた。或る夜には、うとうと眠つて居て、ふと目がさめると、直き一丁ほどのかみにある村の小学校から、朗らかなオルガンの音が聞え出して来た。（略）

幻聴は、幻影をも連れて来た。或は幻聴の前触れがなしに、幻影が一人でも来た。

神経が研ぎ澄まされた夜に、不眠が彼に音を連れてきたという場面である。もちろんこれは、誰もが「田園」に至って味わう「憂鬱」ではない。「……それから、然う、然う、夜半に機を織る筬（おさ）の音を毎夜聞いた事があつた。あの頃、俺は五つか六つ位だつたらう。俺は昔から幻聴の癖があつたものと見える――彼はさう思ひ出して愕いた」という文章も見えるので、とりあえずは彼という人物特有のものであろう。しかしながら、田園や夜のあまりの静けさが、殊更に幻聴に導きやすいことも想像できるところではある。

音に耳を澄ますことで、普段聞こえなかったものが聞こえる、という現象は、先に述べた、音の想像による虚構や、幻聴などに近接するであろう。

音に限らず、小説の描写には、このような、普段見えないものを見せる機能がある。小説における描写は、それが虚構である以

上、日常をただ写したものではないことは当然である。描写とは、再現ではなく、むしろ創造に近い。

岡田三郎の「鴉が縊り殺された日」（『早稲田文学』一九一八年七月）も、作品全体が幻想のような物語である。小学生の悌三が、不可解な行動を繰り返し、最終的には木から落ちて死んでしまう物語であるが、ここには不吉とされる鴉の鳴き声が重奏低音のように冒頭からずっと鳴り響いている。

まず冒頭近くに、「雲雀は何処かで囀つた。山裾の李畑は真白に咲き揃つて、その中に一本のどろの樹が枝を拡げて立つてゐた。その枝の間に鴉が巣を造つたが、卵は孵つて、子鴉は幼い声で鳴いた」と紹介されるところから、音の物語は始まる。

やがて子鴉に災難が訪れる。

その時鴉の喧ましい鳴声――ぎや、〳〵〳〵――と云ふ鳴声が畑の方から起つた。子鴉らしかつた。（略）

子鴉の声がまだ続けざまにきこえた。高い樹の上から巣が落されたやうな騒ぎであつた。（略）

長太は李の樹の間を探しまはつて子鴉を手に提げて女達の前へ来た。三羽らしかつた。親鴉が鳴きながら李の樹の上をあつちへ飛んだり此方へ飛んだりしてゐるのが見えた。

不意に女達の叫び声がきこえた。長太が子鴉を三羽一緒に摑んで女達の鼻先へ突き出したのであつた。（略）やがて一本の李の樹へ登つてすぐに降りて、そして三四間離れた別の樹へまた登つた。すると叢から黒い物が三つ上へあがつた。子鴉の首を縄で縊つて、樹から樹へ張り渡したのであつた。それを見ると悌三も面白をかしく笑つた。『長太ん、面白いことやつたや。羽根つこばくたら〳〵動かして鳴いてるや。』

長太は竿で子鴉を突いたり叩いたりした。（略）子鴉の鳴声は次第に弱つて、しまひには嗄れて全くきこえなくなつたが、親鴉はぢき傍まで降りて来て、うろたへたやうな声をたてながら、枝から枝へと飛びまはつてゐた。山鳩が奥でまた鳴いた。

念のために言えば、ここまでの音は、いわゆる幻聴として書かれたものではない。そのままの風景描写とも思える。ただし、全体が異常な空気で包まれていることは明らかであろう。

この後、長太と悌三の姉が藪の中へ消えていくのが見え、悌三はその姿を追いかけて樺の幹をよじ登った。そうして物語は結末へと向かう。

けい子は枝の折れた音も、悌三の叫び声も、地に墜ちたその物音も知らずに、筵の上に安らかに熟睡してゐた。湿つぽい草地に、まだらに日光が落ちてゐた。悌三の屍骸の上にも。

李畑の方では、親鴉が哀れな声で鳴いてゐた。

こうして物語は閉じられている。ここまで来て、読者には、や

はり物語の全体が、夢幻のように再認識されるであろう。

登場人物たちが作中で聞いているであろう音が、そこに実在したとして、我々読者が聞いている音は、その音を聞いている登場人物のこちら側で、その音をなぞるように意識しているだけである。

この読書行為上の無音の音は、そこに存在するということだけが記述されているのであって、ここに耳が介入する余地はない。そのためによけいに、それらの音が、現実離れしたものであるという特徴を持つことの記述を容易にしているともいえる。

作中においても幻聴であろう音が、読書行為における想像という作業によって、よけいにその虚構性が類比的に読者に伝わると考えられるのである。

幻聴のより分かりやすい例としては、太宰治の「トカトントン」（『群像』一九四七年一月）を挙げることができよう。「某作家」に宛てられたこの書簡体小説の中で、手紙の送り主である「私」が聞く音の擬音表現が「トカトントン」なのである。

最初は、以下のとおり、実際に聞えた音であったらしい。「昭和二十年八月十五日正午」、「兵舎の前」で日本が降参をしたことを聞かされ、いったんは「死なうと思」った「私」が、劇的な変転を体験する場面である。

ああ、その時です。背後の兵舎のはうから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、トカトントンと聞えました。それを聞いたとたんに眼から鱗が落ちるとはあんな時の感じを言ふのでせうか、悲壮も厳粛も一瞬のうちに消え、私は憑きものから離れたやうに、きよろりとなり、なんともどうにも白々しい気持で、夏の真昼の砂原を眺め見渡し、私には如何なる感慨も、何も一つも有りませんでした。

そしてその後「私」は、別の「憑きもの」に憑かれることになる。「私」が「何か物事に感激し、奮ひ立たうとする」と、「どこからとも無く、幽かに、トカトントンとあの金槌の音が聞えて来て、とたんに私はきよろりとなり、（略）何ともはかない、ばからしい気持になる」というのである。そしてついには以下のような状態に陥る。

もう、この頃では、あのトカトントンが、いよいよ頻繁に聞え、新聞をひろげて、新憲法を一条々々熟読しようとすると、トカトントン、局の人事に就いて伯父から相談を掛けられ、名案がふつと胸に浮んでも、トカトントン、あなたの小説を読まうとしても、トカトントン、こなひだこの部落に火事があつて起きて火事場に駈けつけようとして、トカトントン、伯父のお相手で、晩ごはんの時お酒を飲んで、も少し飲んでみようかと思つて、トカトントン、もう気が狂つてしまつてゐるのではなからうかと思つて、これもトカトントン、自殺を考へ、トカトントン。

そうして手紙の最後には、「私はこの手紙を半分も書かぬうちに、もう、トカトントンが、さかんに聞えて来てゐたのです。」とまで書き加えられているのである。

この手紙に対し、「某作家」は、「気取つた苦悩ですね。僕は、あまり同情してゐないんですよ」とした上で、「マタイ伝十章、二八」を引用し、「このイエスの言に、霹靂を感ずる事が出来たら、君の幻聴は止む筈です」と書き送ったのである。

幻聴は、精神の異常など、特殊な環境において生じるものであろうが、先にも書いたとおり、小説が非日常を多く描き、事件や事故が起こることが常であるならば、やはりその作中に登場させやすいことは当然であろう。

内田百閒の「山高帽子」（『中央公論』一九二九年六月）にも「幻聴」という言葉が登場する。

主人公の青地豊二郎は神経衰弱気味で、細君の妹が死にかけた時、妻との会話がうまく成り立たず、思ってもいないことを口にし、また自分の声が自分のではないように聞こえたという挿話を友人の野口に話した時、これも神経衰弱気味の野口が異常に心配して、次のように述べる。

「それは君が云つたのさ。しかしそれにしても危いね。自分の考へてゐない事をいきなり云つたり、自分の云つた事が他人の声に聞こえたりするのは、もうそろそろ本物だよ、君」（略）

「いやいや君の云ふ意味とは違ふのだ。もし本当に君の声でなかつたとすれば、君には既に幻聴が現はれてゐるんだ。いよいよ本物だね、おどかしちやいけないよ」

この場面は後にも思い出されている。

「その後、幻聴は聞こえないかい」

野口はまだ止めなかった。

「大丈夫だよ、幻聴なんか聞くものか」

「でもあの蕎麦屋の話は怖かつたよ。僕は一晩ぢゆうおどかされた。何だか聞こえさうな気がして仕様がなかつた。ねえ君、この人はね」野口は二人の方に向かつて、気味のわるい指で私を指さしながら云つた。「この人にはもう幻聴があるんだよ。怖いねえ。怖いだらう」（略）

私は、野口の云つた幻聴の事が妙に気になり出した。

幻聴の恐ろしい事は、私も知つてゐた。

因みに野口自身は、最後に自殺する。内田百閒の友人であった芥川龍之介がモデルであるとされている。おそらく野口自身が、病気の可能性を自覚し、それが「本物」になることを恐れている。ここでは、幻聴が、その予兆として扱われている。

思えばこの小説は、最初からさまざまな音が描き込まれた、聴覚的な小説であった。例えば料理屋で芸妓二人を相手の次のよう

な会話も見える。

「しんと云ふ音が聞こえるだらう」
「あら、そんな音は聞こえやしないわ。何も聞こえないから、しんとしてるのぢやないの」
「僕には聞こえるんだがなあ」

当然ながら、芸妓二人はやや不審な眼で青地を眺めることになる。

また青地は、夜、寝ていると、おかしな声を聞くこともあった。

それから時時遠くの方で、宵とも夜半とも時刻を定めずに、何だかわからない声が一声づつ聞こえた。多くは北の方から来るらしいのだけれど、それは余りはつきりしなかつた。その声は、何の声に似てゐるとも云はれなかつた。又余り無気味でもなかつた。ただ同じ声を何度も聞くのが気がかりだつた。

要するにこの小説は、青地と野口が、共に気が「違ふ」ことを恐れながらも、次第にそれに近づいていく、いわば神経衰弱への道を競うような物語が、幻聴に代表される音を主たる表現手段として描かれたものだったのである。さらに作中には、「知らないのか。斎藤は気の毒だよ。すつかり変なのだ。昨日病院に入れて来たんだけれどね、僕等だつて、いつああなるか知れない。全く他人事ぢやないと思つた」という、芥川龍之介の友人宇野浩二のことを連想させるような野口の言葉も描き込まれている。この作品、およびこの幻聴は、いわば、「神経症の時代」とも呼ぶべき時代の所産だったようなのである。

ほぼ同じ時代に発表された、梶井基次郎の「筧の話」（『近代風景』一九二八年四月）には、水の音に関わる幻聴が書かれている。

どうした訳で私の心がそんなものに惹きつけられるのか。心がわけても静かだつたある日、それを聞き澄ましてゐた私の耳がふとそのなかに不思議な魅惑がこもつてゐるのを知つたのである。その後追おひに気づいて行つたことなのであるが、この美しい水音を聴いてゐると、その辺りの風景のなかに変な錯誤が感じられて来るのであつた。香もなく花も貧しいのぎ蘭がそのところどころに生えてゐるばかりで、杉の根方はどこも暗く湿つぽかつた。そして筧といへばやはりあたりと一帯の古び朽ちたものをその間に横へてゐるに過ぎないのだった。「そのなかからだ」と私の理性が信じてゐても、澄み透つた水音にしばらく耳を傾けてゐると、聴覚と視覚との統一はすぐばらばらになつてしまつて、変な錯誤の感じとともに、訝かしい魅惑が私の心を充たして来るのだつた。

私はそれによく似た感情を、露草の青い花を眼にするとき経験することがある。草叢の緑とまぎれやすいその青は不思議な惑はしを持つてゐる。私はそれを、露草の花が青空や海と共通の色を持つてゐるところから起る一種の錯覚だと快く信じてゐるのであるが、見えない水音の醸し出す魅惑はそれにどこか似通つてゐた。

すばしこく枝移りする小鳥のやうな不定さは私をいらだたせた。蜃気楼のやうなはかなさは私を切なくした。そして深祕はだんだん深まつてゆくのだつた。私に課せられてゐる暗鬱な周囲のなかで、やがてそれは幻聴のやうに鳴りはじめた。束の間の閃光が私の生命を輝かす。そのたび私はあつあつと思つた。それは、しかし、無限の生命に眩惑されるためではなかつた。私は深い絶望をまのあたりに見なければならなかつたのである。何といふ錯誤だらう！　私は物体が二つに見える酔つ払ひのやうに、同じ現実から二つの表象を見なければならなかつたのだ。しかもその一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負つてゐた。そしてそれらは私がはつきりと見ようとする途端一つに重なつて、またもとの退屈な現実に帰つてしまふのだつた。

かなり感覚的な表現である。捕捉し難い自分の状態を描くために、このような表現が要請されたのであろう。ここでは、水音自体ははっきりと聞こえているが、それが比喩的に、つかみどころのない感覚を呼び覚ましているようである。

いずれにしても、昭和初年代という時代における表現の神経の過敏さを共通して見て取ることができよう。

一方、岡本かの子の「花は勁し」（『文芸春秋』一九三七年六月）の主人公桂子の聞く赤子の鳴き声は、或る意味で正当な登場の仕方をしている。場面は、桂子が茨垣の「針の形をしてゐながら、色も姿も赤子のやうに幼い棘の新芽」を見つけたところである。

「刺すなら刺してご覧。」

桂子は、指紋の渦が緻密で完全に巻いてゐる人差指を伸して、棘の尖を押した。

新芽の棘は軽い抵抗を示しながら、ふによ〳〵と撓んだ。強く押すと芽の腹の皮の外側は、はち切れさうになり、内側は皺が寄つた。するとその芽が切なく叫んだやうに、赤子の泣き声が桂子の耳の奥に幻聴を起させた。桂子は指を引込めた。

三十八の女盛りでありながら、子供一人生まなかつたことが、時々自分に責められた。幾人か生んでゐべき筈の無形のこどもの泣声だけが、ときゞ〳〵耳についた。今まで数多くうけた処生上の迫害やら脅迫から桂子はいくらか被害妄想にかゝつてゐて、幻想や幻覚はしよつちゆうあつた。桂子は気分を襲つて来た悲惨な蝕斑に少し堪らなくなつて、駆け出し

て少女のやうに小布施のアトリエへ転げ込んで、年下の男の友人に何かおいしいものでも喰べさして貰はなければ慰み切れない辛い気持になつた。

ここでの幻聴は、実に隠喩的である。その幻聴の示唆する「処世上の迫害や脅迫」の意味合いが、桂子を敏感にさせていることは言うまでもない。

二、夢の中の音

夢の中に音はあるのだろうか。

よく、夢に色があるかないかという議論を聞くことがある。以前は、無いという人が多かったが、今は、当然のように、あると答える人も多いようである。映像意識が時代とともに変化したのかもしれない。

では、音はどうであろうか。

例えば夏目漱石の「夢十夜」（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』一九〇八年七月二五日～八月五日）の第九夜には、以下のような音の羅列が見られる。

鳥居を潜ると杉の梢で何時でも梟が鳴いてゐる。さうして、冷飯草履の音がぴちや〳〵する。それが拝殿の前で已むと、母は先づ鈴を鳴らして置いて、直にしやがんで柏手を打つ。大抵は此時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。

これなどがごく自然に音が描かれる典型例であろう。

一方、内田百閒の「花火」（一九二一年一月。引用は『冥途』（稲門堂書店、一九二二年二月）に拠った）は、「私」が女に土手のような処を付いていきながら、帰りたいと思っているという話であるが、途中、以下のような不思議な音を聞いている。

何処かでさあさあと云ふ風の渡る様な音が頻りに聞こえた。

「蘆の原に火がついて、もう外へは出られません。あれは蘆の茎が何千も何万も一度に焼け割れてゐる音で御座います」と女がまた云つた。けれども私は帰らうと思つた。こんな女の傍にゐるのは恐ろしい。

不可思議な音であるが、夢の中の出来事のようなので、種明かしは見られない。

「道連」（一九一七年一月。引用は『冥途』（稲門堂書店、一九二二年二月）に拠った）にも、やや不思議な音が描かれている。「私」は、「何時から道連になつたかよく解らない」が、「私」のことを「栄さん」と名で呼ぶ「無気味な男と道連れになつて」歩き続けている。

私は道連とならんで、土手の様な長い道を歩いて行つた。土手だらうと思ふけれど、辺りに川らしいものもない、（略）それだのに私はさつきから、何処かで水の音を聞いてゐる。淵によどんでゐる水を、無理に掻きまはす様な音に聞こえる。道連の足音が時時その音を消した。すると、私はほうと溜息をつく様な心持がする。けれども暫らくするとぢきにまた、その水音が何時とはなしに私の耳に返つてゐた。

これも不気味な音である。後にも「底樋に落ちる様な水音が、また私の耳に戻つて来た」という表現が見え、「私」自身も、実際の音とは思っていないようである。

やがて道連は、自分が「生まれなかつた私の兄」で、「ただ一口己を兄さんと呼んでおくれ」と泣いて頼むに至り、物語は最高潮を迎える。そして、「早く、早く」と「うろたへた様に」言う時、「何処だか方角のたたぬ辺りで、夜鳥が頻りに戸のきしむ様な声をして鳴」き、「道連は矢張り、すたすたと冷たい足音をたてて行」き、「それぢやもうお前さんともお別れだ。（略）お前さんはたうとう己の頼みをきいてくれないんだ」と言う。この時、「私」は、「さつきから聞いてゐた水音にも、何となく聞き覚えのある様な気がして」くる。「私」も声を出そうとするが、咽喉が詰まって出ない。道連はさらに、「もうこれで別れたら又いつ会ふことだがわからない」と泣く泣く言う。ようやく私が「思はず兄さんと云ひながら道連に取り縋らうとした」途端、道連は急に姿を消すのである。

ここに見られる論理展開は、現実界のものとはやや異なり、実にもどかしいものである。思うようにいくようでいかないこと自体が、夢の中らしさを表すとも考えられよう。

もちろん、「私」の思考が全く支離滅裂であるのではない。例えば、音について、次のようにも考えを及ぼしている。

黙つて、道連の行く方へただ歩いてゐるうち、馬追ひ虫の鋭い声が何時の間にか私の耳に馴れてゐた。気がついた時には、何時からそれを聞いてゐたんだか、たどつて見る事も出来なかつた。それにしても、草の枯れてしまつた後に、馬追ひの生き残るのは腑に落ちないと私は思つた。

要するに、「私」の思考実験のようなものがひたすら繰り返されているのである。夢のある種のものは、この独り相撲のような思考実験をなぞるものとすれば、理解できるものも多いのではなかろうか。

三、夢と現実を繋ぐ音

江戸川乱歩の「白昼夢」（『新青年』一九二五年七月）は、冒頭に、「あれは、白昼の悪夢であったか、それとも現実の出来事であったか」と書かれるように、現実界で起こったことでも、あま

りに異常であったり、現実離れしたりしている場合には、夢と同様視されることもある。この短編は、道端で、ある演説者が、自分の「女房」を殺し、それを蝋細工にしてガラス箱に入れ見世物にしている経緯を「聴聞」し、その「蝋細工」を恐怖のうちに見物する物語であるが、そこでは、近くを通る楽隊も、この男の話の演出の一端を担っている。

にぎやかな広告の楽隊が通り過ぎた。大ラッパが頓狂な音を出した。「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の」子供らが節に合わせて歌いながら、ゾロゾロとついて行った。

「諸君、あれはおれのことを触れまわっているのだ。真柄太郎は人殺しだ、人殺しだ、そういって触れまわっているのだ」

また笑い声が起こった。楽隊の太鼓の音だけが、男の演説の伴奏ででもあるように、いつまでも、いつまでも聞こえていた。

ただの見世物として楽しんでいる群衆とは別に、死体が本物と信じる自分だけが倒れそうになるほど恐怖に慄いている、その様子が、音楽の聞き様の違いに類比されて表現されている。ここには、現実界に突如現れた夢の世界という、境界性が見て取れる。

泉鏡花の「紫障子」（『新小説』一九一九年三月）の冒頭の音は、このやや幻想めいた物語への導入の役割を果たしている。あたかも、その音が現実世界と夢の世界とを繋いでいるかの如くである。

戸外には黒い雨が簾のやうに降つて、颯と繁吹いて雨戸に当ると、ばら〳〵と断れて礫のやうに乱れながら、隙間洩る閨の灯で発と白く成つて入交りつゝ、ばら〳〵と枕頭の障子を敲くと、其が浸込むやうに、ぱら〳〵と鳴つて、面を打つて目、口、鼻を飛塞ぐ、其の鬱陶しさと言つたらない。

が、払つても落ちず、撫でれば、掻けば、粘々と附着いて其のまゝ痘痕に成りさうで、生暖く、臭い、腥い。

其のおなじ事を、繰返すうちに、（略）目が覚めた。否、目が覚めたと言ふより、正気づいて我に返つたのであらう。半ば夢心地に魘されて居たのであるから。……

ここには、雨なのか何かわからないものが、音と共に実に触感的に、また嗅覚的に描かれている。

室生犀星の「香炉を盗む」（『中央公論』一九二〇年九月）にも、夢うつつの間の音が描かれている。

十時がすぎ、十一時がすぎ、最終列車の汽笛がいつものやうにしたときまで、女はやつぱり坐つたまま眠るでもなく醒めるでもない、うつらうつらした籠に揺られるやうな気でゆらゆらしてゐた。が間もなく何時ものやうにその時刻から尻

のはうから逆に上つてくるやうな水のやうなものをかんじ、はつきりと目薬をさしたやうに瞳が冴え返つてくることをかんじるのであつた。何が故であるか、その晩い時刻は先のかの女をおそうた幻影の内にもう一度かの女を引き摺り込むのであつた。かの女は搾木にかけられたやうに硬ばつて、頻りにその聴覚をかたむけはじめた。そのとき何処か道路のやうなところで跫音がした。いそいで来るらしい木魚のやうな遠い音が、明るい電燈の点いてゐる広いところから、鉤形にまがつて急にほの暗い通りに歩き近づいてくるやうな気がしてきた。

かの女はそのとき目を閉ぢて耳だけを澄してゐたのである。奇妙な下駄の音はすこしづつはつきりしてきて、坂のやうなところを上つてきた。（略）がつたりと音がした。女がびつくりして目をあけた。格子戸があいて男がかへつてきたのである。

何のことはない、男が帰ってきただけの音がこのように描かれるように、この小説には、男と女のわかりあえなさや決定的な溝とも喩えるべき心理的な乖離が、感覚的に描かれている。男も「変な女だ。猫のやうに音をたてない。上目してぢつと見つめられると、何も彼も写真に撮つたやうに知つた顔をするのだ」と感じている。

中河与一の「悩ましき妄想」（『新公論』一九二一年六月）には、ガード下から見上げた鉄道の枕木に血で固まった女の髪が落ちているのが見え、以下のような音を聞いている。

彼はガードから四間程てまへに退いた時、頭を振つてみた。そしてどうすべきか明瞭に考へねばならぬと思つて眼をつぶつた。と、すぐ何処か近い小川の流れの音が耳一杯湧くやうに溢れて来た。チロチロと云ふのである。益々大きく拡がり乍ら。それは頭の中に溢れ得る樫の量のある重い音であつた。

どのような音か、はっきりとは分かりづらい表現であるが、それが、「彼」が毎夜襲われる「恐ろしい不眠症と悪夢」に関わるものであることは容易に想像できる。

睡眠に入る境界と、眠りから覚める境界において、音が夢に入る前の現実の余韻や、眠りから覚めていく際の現実の先触れとなることは、容易に想像される。その際の音は、現実の意識と夢とを繋いでいるが、本来、音を聞くという行為において、耳を介してそれを脳が認識するという仕組み自体に、音というものの夢幻的なものに近い性格が準備されているとも考えられる。音や匂いや触感は、映像認識に比較して、感覚器と脳の認識とにいくばくかの距離があり、そこに幻と意識されるある種のずれが生じる可能性が高いのではないだろうか。

江戸川乱歩「吸血鬼」（『報知新聞』夕刊、一九三〇年九月二七

日～一九三一年三月一二日）の「生き地獄」には、火葬場の棺の中に閉じ込められた母子が聞く、幻聴と現実の音の混在が描かれている。

それとも、もしや、あの人は今、私たちを助けるために、この火葬場へ自動車を飛ばしているのではあるまいか、と思うと、どこか遠くの遠くの方から、エンジンの響きが聞こえてくるような気もするのだ。

「坊や、ほら聞いてごらんなさい。自動車の音が聞こえるでしょう。あの自動車にね、三谷さんが乗っていらっしゃるのよ」

倭文子は幻聴を信じて、気ちがいめいたことを口ばしり、なおも耳をすました。

聞こえる、聞こえる。だが、エンジンの音ではない。もっと近くの、倭文子たちのま下から聞こえてくる、一種異様の物音だ。

ザラザラとなにかの落ちる音。カランと金属のふれあう響き。そして、かすかに人の歌う声。

卑俗な流行歌を歌う、男のドラ声だ。

ああ、わかった。係りの人が鼻唄を歌いながら、下の焚き口へシャベルで石炭を投げいれているのだ。

いよいよ最後のときがきた。

耳をすますと、気のせいか、ボーッともえあがる炎の音まで聞こえてくる。

「かあさま、どうしたの？　アレなに？」

茂が乳房をはなして、おずおずとたずねた。もちろんささやき声だから、棺と鉄扉と二重のそとまで聞こえるはずはない。

「茂ちゃん、いよいよ天国へ行けるのよ。いま、神様がおむかえにいらっしゃるのよ」

とはいうものの、倭文子の心臓は、恐怖のために破れそうだ。

「神様、どこにいるの？」

「ほら、聞こえるでしょう。ボーッという音、アレ神様の羽根の音なのよ」

彼女はもう気が違いそうだ。

この悲劇的な場面を音で描いた描写は、殊更に想像力を喚起して効果的と言えよう。

乱歩は幻聴を描く名手である。「猟奇の果」（『文芸倶楽部』一九三〇年一月～一二月）の「愛之助己が妻を尾行して怪屋に至ること」にも、次のような描写が見られる。

愛之助は怪屋の一室で夜を明かした。そして結局、警察官に救い出されるまでのいきさつは、くわしく書いてもいっこう面白くないことだから、ごく簡単にかたづけると、ドアに

鍵をかけて悪魔が立ち去ったあとには、暗闇と静寂の長い長い時があったばかりだ。愛之助はそこの板張りの床にへたばって、はげしい恐怖に震え、あらゆる妄想にさいなまれた。その中でもっとも際立っていた妄想は、天井からポトポトと何かのしたたり落ちる幻聴であった。それが長い長い一と晩中、絶えてはつづいていた。つまり彼はその部屋の真上の二階に、さっきの生首の女の、切り離された胴体が、みだらに血みどろに横わっている光景を幻想したからである。

ここには、過度の想像力による幻想が、幻聴を招く経緯が書かれている。

一方、堀辰雄の「恢復期」（『改造』一九三一年一二月）には、次のような場面がある。

毎晩、十二時頃になると看護婦たちが彼の病室に見舞ひにきた。彼はからかひ半分彼女たちのことを「鳩ぽつぽ」と呼んでゐた。それは看護婦たちが鳩の歩き方を真似してゐるやうな恰好をして廊下を歩いてくるからだつた。さうして看護婦たちは彼の病室のドアをすうつと音のしないやうに開け、しばらく室内の様子をうかがひながら闇のなかに彼が眠つてゐるらしいのを確めると、またすつとドアを閉めて、再び鳩のやうな足どりで廊下を立去つた。看護婦たちのなかにはドアも開けずにその鍵孔から彼の様子を覗いて行くものもあつた。そんな時刻にはいつもまだ眠れないでゐるところの彼は、さういふ看護婦たちの行動を一つ一つ手にとるやうに知ることが出来た。また、それまでうとうと眠つてゐるやうな場合でも、きつとそのへんな凝視を彼は神経に感じて目をさましてしまふのが常であった。（略）そのうちにその深夜の訪問は十二時に限らず行はれるやうになつた。ずつとその時刻の過ぎた夜中の二時か三時になつて、まだ眠れずにゐる彼はドアがひとりでに開いたり閉ぢたりするのを見た。誰かが鍵孔からぢつと自分の様子をうかがつてゐるのを感じた。しかもそれは一晩のうちに何回となく繰り返された。彼はその度毎にぞつとしながら、いつも眠つた真似をしてゐた。そんな時彼の神経過敏になつた耳は、どうかすると夜ふけの廊下に何かの翼の音のするのを聞いたりした。

しかし彼はその子供らしい恐怖を誰にも訴へなかつた。彼はその不眠と熱のためであるらしい幻聴に彼自身を馴らさうとした。そして子供たちが「鳩ぽつぽ」で遊ぶやうにそれで遊ばうとしてゐた。――だが或る朝、院長は、彼に彼が肋膜炎を再発してゐることを告げた。そして彼が夜ふけの幻聴のやうに聞いてゐた何かの翼の音は彼自身の胸の中から起るものであることを知らされた。

ここには、やや落し噺めいた、幻聴の原因解明が書かれている。

四、二重の聞く行為

冒頭にも述べたが、幻聴や夢の中の音は、必ずしも音を伴わない音であり、その点で、読書行為、特に黙読における小説の中の音と似る性格を持つ。さらに、小説の中の幻聴や夢の音を聞くという行為は、その意味で、二重に、聞こえない音を聞いていることになる。

横光利一「旅愁」（『東京日日新聞』一九三七年四月一四日～八月六日、『文芸春秋』一九三九年五月～一九四三年八月断続、『文学界』一九四三年九月～一九四四年二月、『文芸春秋』一九四四年六月～一九四五年一月断続、『人間』一九四六年四月）の「第一篇」に以下のような場面がある。

千鶴子はさう云ひながらピツケルで欠いた氷の破片を、断層の底へ投げ込んで覗いてみた。破片はすぐ見えなくなつたが、屈曲する断面にあたる氷の音が、「ころん、ころん、」と軽やかなわびしい音をたてつづけ、だんだん小さくなりつつ消えていつた。

「まア、いい音だわ。一寸お聞きになつて御覧なさいよ。」

と千鶴子は矢代を呼んだ。二人は擦りよるやうに身を蹲め、破片を投げ込んでは断層に耳を近づけた。まつたくそれは果てしれぬ氷河の底へ落ち込む虚無の音であつた。音が消えてもまだ鳴りつづける幻聴となつて、半音を響かせる絃の音に似てゐた。矢代は空を仰いだ。日が照り輝いてゐるのに、松柏を渡る風のやうな虚しさがじつと浮雲を支へてゐた。

比喩的で象徴的な音の表現であるが、聞こえない音を、まず最初の氷の音を読者に聞かせることによって、想像力を高めようとしている。

そもそも聞くという行為には、この非音声要素が伴っている。すなわち実際の音とは別に、そこに聞こえる音的なる付随物が存在するのである。そしてそれらが合わさって、想像の音になり、この想像の音から、聞き手の意志や能動的姿勢などを取り除けば、幻聴となる。

幻聴がその典型であるように、それは、実際の聴く行為とは別の行為である。この乖離は、実はすべての聞くという行為において生じている現象ではなかろうか。我々は、極端な言い方をすれば、元の本来の音を、永遠に聞くことはない。それは我々聞き手の耳を介し、脳が受け取った音であって、そこには元の音からの大なり小なりのずれが生じているのである。

これは、聴覚に限った問題でもあるまい。おそらく五感すべてに共通する問題であろう。味がその典型であるように、同じワインを飲んでも、すべての人が同じ味を感じ取っているわけではなかろう。

あらゆる表現には、すべてこのずれが生じていることが大前提であり、このずれを隠し、一つの全体が一つであると仮保証しているのが、記号の役割である。

殊に文字芸術という記号性の高い芸術においては、このことに気づくことが、芸術作品の性格に近づく秘訣であろう。そこには、読者の個別性を超えて、一つの作品という共通のテクストを仮構築する力が働いている。

その、個別性があることを前提に一つの全体がいわば後から構築されたものが作品であるという、読者を含めたテクストの非決定的な性格を気づかせてくれる要素の一つが、聴覚要素の検討における幻聴や夢の中の音というやや特殊な性格の音であると言えよう。